

## 〔研究余録〕

# 『金光禪師行狀』について

出光 泰生

## はじめに

津軽地方の浄土宗布教に大きな足跡を残したとされる金光上人については、『円光大師行狀画図翼賛』<sup>〔1〕</sup>巻四十六に「決答疑問抄」云々、又禪門〈道弁秩父之一門也〉云々、昔、親盛法師語予云々、上人在世之時奉問云々、御往生之後浄土之法門不審、可問誰人乎、上人答曰、聖光房金光房、委知<sup>レ</sup>所存<sup>一</sup>、彼等、為<sup>レ</sup>遠国、能化<sup>一</sup>、為<sup>レ</sup>汝、不易、京中、聖覚法印亦知<sup>レ</sup>我義<sup>一</sup>（本伝之同）……<sup>〔2〕</sup>とあるように、今日浄土宗において宗祖法然房源空（以下法然上人と記す）の正統な継承者として二祖上人と仰がれる聖光房弁長（一一六二―一二三八）とならぶ学識との逸話が伝えられるが、その実像についてはさだかでない。この金光上人の伝としてまとまったものは、今日管見に入る資料では鎌倉時代の年紀を有する『奥州行岳西光寺開山金光禪師行狀史』、『奥州東日流正中山大権現略縁起』の二書のみである（浄土宗の研究者の間では、二書あわせて『金光禪師行狀』と称されているので、以下の文では便宜この名称を用いる）。『金光禪師行狀』は、望西楼了慧道光（一二四二―一三三〇）の『聖光上人伝』を松阪清光寺の白蓮社激誉信岡（一七五五―一八二〇）

が纂輯した際、その付録という形で世に出されたものである。信岡の跋文の年紀が文化十四年（一八一七）とあるので、その頃には脱稿されていたようだが、公刊は信岡死後の文政四年（一八二二）のことである。

## 一 遠藤聡明氏の指摘する『金光禪師行狀』に関する疑問点

この『金光禪師行狀』については、大正年代に刊行された浄土宗の聖典ともいうべき『浄土宗全書』の第十七巻に掲載された関係もあり、浄土宗内では長らくそれを疑問視することがなかったという。ところが、近年青森県黒石市の浄土宗寺院来迎寺の遠藤聡明氏によりその史的価値に多分に問題がある旨が指摘された。<sup>〔3〕</sup>

『仏教論叢』掲載の一連の論文および『金光上人関係伝承資料集』の解説を通じて明らかにされた遠藤氏の所論は多岐にわたるが、その主要な根拠をあげると、

- (1) 『金光禪師行狀』の所伝の描く金光上人像については「専修念仏者と言うより、むしろ修験者に近い」こと。したがって、本来の述作の目的は金光上人の顕彰にあるのではなく、金光上人の前に妙徳、善救、大天靈の三大神が示現し、それを金光上人が正中山に祭祀したとの記載があることから、「中山修験道場」ともいうべきものを宣揚することにあるとされる。<sup>〔4〕</sup>

- (2) 『金光禪師行狀』には、それ以前の浄土宗の文献に記載のない金光上人の没年月日を建保五年三月二十五日、著書として『末法念仏独明鈔』をあげるという特色があるが、この記述には次のような点

で疑問があるとされる。『金光禪師行状』の出現する以前の浄土宗の文献である『御伝翼賛遺事』(享保九年(一七二四)、浄土宗名越派<sup>⑩</sup>〔便宜上浄土宗を冠したほうが一般に理解しやすいとみられるので、初出のみ浄土宗を付した。以下の文では、単に名越派とのみ記す〕の学僧義山の著)には、金光上人の墓が浪岡にあるとの伝説は紹介されているが、「今ニ墳墓有テ小塔ヲ残セリ、然ドモ星霜稍経ヌレバ文字悉ク磨滅シテ其年月日共ニ分明ナラズ、金光房示寂ノ年月安定ナラザル事ハ此由ニヤ」と記されているように、没年月日は不明とされていたし、著書に関しても何ら言及がない。

(3) 『金光禪師行状』は、文化九年(一八一二)三月、奥州津軽板柳の浄土宗寺院大善寺の天蓮社良導寿源が「館野越村山崎氏力古記中」より見出したものを、真似牛村(宮城県加美郡色麻町)の曹洞宗寺院の堂頭長老を通じて信岡が耳にしたことから公刊されたというように、突然世に出たもので、その出現形態には疑問があること<sup>⑪</sup>。というもので、以上の点から、遠藤氏は次のように述べられた。

「従来何百年も不明であつた事柄が突発的に判明する文書は、ほとんど出現しない。もし、出現した場合には、充分な資料批判を必要とする」<sup>⑫</sup>

さらに、『金光禪師行状』の性格に関して「中山修験道場を宣揚する立場の江戸時代人が、鎌倉時代の年号を付して書いたもの」と推論されること、その「所伝内容、出現形態、内容上の問題点等」が、近年筆跡鑑定の結果、所蔵者自身が偽作したものではと取り沙汰された『東日流外三郡誌』に代表される和田文書と同一線上にあるもので、和田文書は、この書を下敷きに造作された公算が高いとも言及されている<sup>⑬</sup>。

## 二 阿蘇千代竹について

和田文書との関連についてはともかく、以上の指摘によりこの書が多分に問題含みの資料であることは明白である。では、この書は何人によって造作されたものであろうか。遠藤聡明氏は、この書の成立について「寿源が両文献を確認したという文化九年をさほどさかのぼり得」とされ、金光上人の没年月日が建保五年三月二十五日というのは「文化年間に作りだされたものと推考する」<sup>⑭</sup>と述べられているように、良導寿源その人の造作とみなされている。

おおむね正鵠を射た所論で従うべき見解とみられるが、建保五年三月二十五日説が「文化年間に作り出され」という年代については、浪岡町北中野宇天王に所在する浄土宗寺院西光院の管理する特別境内地にある金光上人の墳墓に「黄蓮社良華金光上人墓碑 阿曾千代竹平時盛建 天明九(乙酉)三月廿五日」という墓碑が存在することから、もう少しさかのぼらせて考える必要があるように思われる。もとより、この墓碑に刻まれた「三月廿五日」は建碑の月日であり、墓碑そのものに「三月廿五日」が金光上人の忌日である旨が明記されているわけではない。

ただし、注意を要するのは、この墓碑を建立した阿蘇千代竹について、葛西覽造氏の「津軽地方における長慶天皇の御陵墓に就いて」と題する論文に次の記述が存在することである。

「古老の言によれば昔はこの辺に五輪塔が沢山あつて草叢に埋もれてゐたのを天明九年北中野の医者阿蘇千代竹なる者『此は金光上人の墓であ

らう』といふので金光上人の石碑を建て五輪塔はその側に集めておい<sup>18</sup>た」

この阿蘇千代竹という人物は、肥後の阿蘇神社の大宮司の後裔で、その家系は、天文年間（一五三二～一五五五）、戦乱で荒廃した御所の修繕の勅命を受けた大宮司阿蘇惟豊（一四九二～一五五九）の子惟忠が大乱による難を避けて出羽国庄内に数年間居住し、上黒川邑の豪族となったことにはじまる。上黒川時代のことには記録が兵火に焼かれ判然としないが、元禄年間（一六八八～一七〇四）に上黒川より津軽の浪岡に移転し、阿蘇神社を建立。正徳元年（一七一）医業を営み、享保三年（一七二二）北中野に移転した阿蘇玄庵（明和六年（一七六九）没）の嫡男で、父同様医業を営み、文化十年（一八一三）十一月二十六日に没したとされる。<sup>19</sup>

### 三 阿蘇千代竹建立の金光上人の墓碑に内在する問題点

阿蘇千代竹の伝については、筆者の管見に入った資料の範囲ではこれ以上分明にし得ないが、問題は阿蘇千代竹が、なぜ金光上人の墓碑を建立したのか。そして、その建立した墓碑に「黄蓮社良華金光」と記されているかである。

前者について思い当たるのは、金光上人の没年月日を建保五年三月二十五日と記す『金光禪師行状』が「館野越村山崎氏力古記中」より発見されたとされていることである。館野越村の山崎氏とは、津軽為信に滅ぼされた浪岡御所北畠氏の後裔で、山崎と改姓し、館野越に居住したも

のである（明治になり、北畠に復姓）。阿蘇千代竹とほぼ同時代の山崎家の当主に、文化二年（一八〇五）に没した山崎立朴がいる。立朴といえば、永禄年間に一族佐藤只之助が筆を下し、爾来立朴の代に及ぶ山崎家の家記を十二巻に改編し、天明初年に好学の士に示した『永禄日記』の編纂が著名であるが、この立朴は医者にして好書家であったといわれる。『金光禪師行状』に関連する「山崎氏力古記」の実態については、さだかでないが、昭和四十八年に刊行された着倉弥八氏の『蓬田村史』によると、昭和三十四年（一九五九）に、館野越の山崎家の子孫である北畠顯宣氏の所伝古文書に基づき蓬田村の阿弥陀川に建立された金光上人の碑文に「北畠顯宣老師所伝古文書二曰く後世長慶天皇上人ノ為ニ円覚大師ノ尊号勅賜セリト 浪岡二十四世 願就北畠栄太郎 撰」とあることから、金光上人に関連する何らかの記録が存在した蓋然性には否定しがたいものがある。

いかなる経緯で、山崎家に金光上人に関連する記録が存在したのか判然としないが、金光上人の墓碑を建立した阿蘇千代竹も医者であることから、阿蘇千代竹と山崎立朴の間に何らかの交流が存在し、阿蘇千代竹も「山崎氏力古記」を見ていた可能性も考えられなくもない。そして、それが同人による墓碑の建立につながったのではないかと思われる。しかし、目下のところ、このことを裏付ける史料は一切存在せず、推測の域にとどまらざるを得ない。

後者についてもなかなかむずかしい。まず「黄蓮社」であるが、蓮社号と呼ばれる浄土宗で用いられる僧侶の法号の一つとみられる。蓮社号は、十三世紀中頃の円心（宗円、二祖聖光房弁長の弟子）が宋に渡って

廬山の宗風を伝え、自ら白蓮社と称したことに始まる。後に檀林制度の確立とともに、宗戒兩脈を受け、一宗の奥義を究めたものに許す嘉号となり、現在も行われているものであるが、金光上人の時代には存在しない法号である。これだけでも問題があるところに、さらに不審なことは、次の「良華」である。「良華」というのは、名越派の良号にあたるものとみられる。この良号も金光上人よりはるか後の時代、名越派の二代目良慶明心（一二六九〜一三三六）が、師にあたる名越派祖の尊観良井より良の字を授けられたことに由来するとされている。<sup>(21)</sup> いかなるわけで、金光上人にその法号が用いられているのか判然としない。

#### 四 「黄蓮社良華金光」の意味するもの

この「黄蓮社良華金光」については、『金光上人関係伝承資料集』によると、長野県須坂市の浄土宗寺院西福寺に伝来する位牌の法名としてみえ、同寺の開山を金光上人と伝えているということが報告されている。ただし、『浄土宗寺院由緒書』にみえる元禄八年（一六九五）時点の西福寺の寺歴に関する記載には、金光上人のことは一切記されず、同寺の開山は三蓮社縁蒼とあり、金光上人を同寺の開山とする伝承の初見は、同寺第三十五世住職太田大成氏の記した明治十年代以前にさかのぼり得ず、確実なことは一切わからないとされている。<sup>(22)</sup> 『金光上人関係伝承資料集』では、太田大成氏が明治十四年（一八八一）前後に記した『西福寺旧記録』によると、明治七年（一八七四）十二月、太田大成氏が浪岡西光院を訪問し、金光上人の墳墓の「黄蓮社良華金光」の石碑を実見。

西福寺に伝来する位牌にある「自筆ト伝フル法名ノ波ノ津輕ニ勒スルモノト亦相違ノ無キ縦横彼此冥ニ布節ヲ合シ、信ヲ一場ニ決シ畢ヌ」と、西福寺の寺伝の正さを示す論拠の一つであるとの説を開陳したとある。

このことから『金光上人関係伝承資料集』では「須坂における金光上人の伝承は少なくとも明治七年前からすでに存在したものと見てよいのではなからうか」と記すが、これが元来同寺に存在した伝承であったという確実な証拠はない。西福寺の位牌に「黄蓮社良華金光」とあるのが、浪岡の墳墓の石碑以前にさかのぼるといえるかどうかとも判然としない。

この西福寺の問題に関してはしばらくおくとしても、「黄蓮社良華金光」はいったい何に由来するのか。そこで注意を要するのは、名越派は室町時代以降、関東・東北地方に教線を拡大し、江戸時代、津輕の浄土宗寺院の大半は名越派に属していたことである。

このことからすると、金光上人の墳墓の石碑に記された法号に名越派の良号とみられる「良華」が存在するのは、名越派の関与になるとみられる。ちなみに、遠藤氏が『金光禪師行状』の作者と想定されている良導寿源も名越派の僧侶である。

『金光禪師行状』そのものには、「黄蓮社良華金光」という法号に関する記述はないが、注意を要するのは、金光上人が正中山に三大神を祭祀していることである。浄土宗は本来神祇不拝の立場を教義に内包している。<sup>(23)</sup> 正中山に祭祀された三大神には、修験の臭いがあるので、純粹な意味で神祇にあたるものとみなし得るかはさだかでないが、これも神祇不拝の地平を外れた特異な事例に該当するものとみられる。

## 五 『金光禪師行狀』に東北地方に教線を拡大した名越派の教義が影響した可能性

『金光禪師行狀』において、なぜこのような特異な事例が出現するのか。このことを考えるうえで想起されるのは、「浄土宗名越派三世良山上人について」において佐藤孝徳氏が「良山上人の名越派の教えは、阿弥陀如来に帰依する以外に密教的要素が強く、日本古来の神々である熊野権現、八幡大菩薩等の神社信仰が特に厚いのも特徴である」とされ、「こうした思想は、上人没後、名越派末流の僧侶が神社の別当となり、寺そのものを神社の近くに建立するなど、密教系の真言宗、天台宗のような面を多分に持つにいたった。こうした行為は浄土宗の寺院がとるべき行いではないと、真言宗側から強い非難をうけた」と指摘されていることである。

この名越派の性格からすれば、さきほどみた『金光禪師行狀』の特異な事例は、良山上人以降の名越派の教義そのものを反映したもので、さほど異とすることでもないと思われる。筆者は、阿蘇千代竹の建立した金光上人墳墓の石碑に名越派の良号とみられる「良華」が存在することと『金光禪師行狀』にみられる、浄土宗が本来示す神祇不拝ともいうべき立場といささか異なる事例を示す正中山の三大神の祭祀が語られるのは、同一線上に属するものであり、「黄蓮社良華金光」、「金光禪師行狀」を生み出した背景に、東北地方に教線を拡大した名越派の影響があるのではないかと考えている。このことをいっそう補強するのは、遠藤

聡明氏が『金光禪師行狀』の真の作者が良導寿源ではないかと推測されていることであるが、筆者は、『金光禪師行狀』の形成過程において良導寿源が深く関与していることは否定しがたいが、その前にもう一段階存在するのではと推測している。というのは、『金光禪師行狀』には「建保初」に善導大師の『般舟讃』と「大師遺誓」（法然上人の一枚起請文のこと）を書写して金光上人に贈ったという奇妙な記載が存在することである。『金光上人関係伝承資料集』に指摘するように「その期間に『般舟讃』は発見されていないはずであるし、『一枚起請文』も源智が秘匿していたとされている」のである。

そして、この点については、良導寿源と同じく名越派に属する羽州最上（山形県天童市）三宝寺の善導社良知弁識が文政七年（一八二四）三月に著した『金光上人事蹟』（『金光禪師行狀』の論難書）にも「是又疑べき事」「甚信難キ虚説ナル歟」と批判するところである。もとより、良導寿源は『金光禪師行狀』を称賛しているという点で、良知弁識と意見を異にしているので、「建保初」の『般舟讃』と「大師遺誓」の件をもつて異とするに足らないとみることもできるかも知れない。しかし、良導寿源その人が『般舟讃』と「大師遺誓」の件を述作したのであれば、このような奇妙な記載をしたとはとうてい思えない。遠藤氏は「奥内清岸寺旧蔵諸写本による江戸時代の金光上人関係文献の再検討」の中で、良導寿源について、次のように記されている。

「既存の縁起に序文と流通分を付加するについてはある程度卓越した文章力が求められ、誰もが容易になし得ることとは思われない。文化年間に板柳大善寺（青森県北津軽郡板柳町）の住職であった天蓮社良導寿源

はその才に長け、同時期の地域屈指の名文家であつたかに見受けられる<sup>(2)</sup>。

この評価からいって、『金光禪師行状』の骨子は、良導寿源の関与以前に形成されていた可能性があると筆者は推測している。もとより、それが何者であるかは判然としないが、良導寿源でないのは無論のこと名越派の僧侶ではないとみられる。

以上みたように『金光禪師行状』を誕生させた最初の段階については判然としないが、その最終的完成にあたっては、名越派の教義が大きな影響を投じたものと筆者は考える。そして、『金光禪師行状』を検討することによって、東北地方における名越派の動向を明らかにし得るのではないかとの期待を持っている。従来『金光禪師行状』については、史学者の間ではさほど関心をもたれなかった。まして、その史料的价值に疑問が投げられた今日では、なおさらのことと思われる。しかし、上記のような観点で『金光禪師行状』を見直せば、新たな展開が期待されるものと筆者は考えている。もとより本稿で述べたことは推測に過ぎる嫌いがなくもない。読者諸彦のご叱正を賜れば幸いである。

## 註

- (1) 浄土宗名越派の学僧聞証(一六三四―一六八八)が『法然上人行状画面図』(後伏見天皇の勅命により、知恩院第八世如一国師の弟子で天台宗の学僧であつた舜昌が編纂。巻数から『四十八巻伝』、勅命によることから『勅修御伝』とも称される)の校正と注解を後世に残すよう、門弟の義山、円智に命じたことからはじめたもの。義山が原本と対校し、

円智が注解をそれぞれ担当したが、円智が業半ばにして病没したことから、義山がこれを引き継ぎ重修完成し、宝永元年(一七〇四)公けにしたもの。全六十巻。

- (2) 『浄土宗全書』十六巻、阿川文正監修、金子寛哉・遠藤聡明・片山泰徳編『金光上人関係伝承資料集』(浄土宗教学局、一九九九。以下『伝承資料集』と記す)九五頁。

- (3) 聖光は房名。弁長は諱。字は弁阿という。浄土宗第二代。浄土宗鎮西派(以下、単に鎮西派と記す)の祖。九州西北部を中心に活躍。宗祖法然の滅後、真言・天台宗等の聖道諸宗のはげしい非難攻撃と、宗祖門弟による異議続出の中、選択本願・専修念仏の祖道を祖述し、顕彰。筑後の地にあつて、浄土宗の正流の宗学を確立したと伝えられる。弁長は、浄土宗において法然につぐ二祖上人と仰がれているが、法然滅後の門下は多流多派に分かれたため、弁長在世中の浄土宗第二代の位置は安定したものではなかったという。弁長の浄土宗第二代の地位が確立されたのは、弁長の晩年の門弟良忠(一一九九―一二八七)が、当時の政治の中心であり諸宗の集まっている鎌倉に入り、ここを中心に教化にあたり、関東における鎮西派の基盤を確立。良忠の滅後、その多くの門弟の中で、良暁・性心・尊観・道光・然空・慈心の六人が主に活躍し、互いに教縁の拡張をはかり、自派の正統性を主張したことからやがて白旗派、藤田派、名越派、三条派、一条派、木幡派の六派が分出。これが浄土宗の興隆に大きな貢献をし、浄土宗発展の基盤を形成したことによるとされている。
- (4) 良忠門下六派の一つ三条派の祖。相模国鎌倉の人。はじめ比叡山に登り尊慧について出家したが、後良忠に入門。文永九年(一二七二)頃、京都に移転、洛東三条に悟真寺を建立。主としてここを拠点に、元徳二年(一二三〇)八十八歳で没するまで京洛にあつて活躍した。

(5) 江戸中期の学僧。白蓮社激著と号す。尾張国海西郡大成村の人。俗姓は中山氏。寛政十二年（一八〇〇）伊勢松阪清光寺に住し、以来二十余年同寺にあつて講説、教化に努めた。つとに浄土宗の典籍に誤りの多いことを嘆き、浄土宗諸典籍の校訂出版に活躍した。

(6) 『仏教論叢』掲載の一連の論文としては、「金光上人事蹟調査―津軽における信仰状況」、『仏教論叢』三三三号、一九八九。以下遠藤(a)論文と記す、「金光上人事蹟調査資料整理報告―和田文書の検討」、『仏教論叢』三五号、一九九一。以下遠藤(b)論文と記す、「天童三宝寺弁識『金光上人事蹟』にみる『金光禪師行状』の問題点」、『仏教論叢』三六号、一九九二。以下遠藤(c)論文と記す）がある。『伝承資料集』における解説は「和田文書」に言及がある。

(7) 遠藤(a)論文、七四頁。

(8) 遠藤(c)論文、六六頁等。

(9) 『円光大師行状画図翼賛』の刊行後、義山がさらに史料収集につとめ、前書刊行時の不備、不明点を補足したもの。金光上人に関しては「石垣金光坊事実」と銘打って、全編の約半分の紙面を費して述べられている。实地踏査の成果をふまえて、これまで金光上人の入滅地として有力であった奥州栗原郡（宮城県）付近との一説を退け、津軽浪岡説が定説化されるうえで大きな役割を果たした書として注目される。

(10) 良忠門下六派の一つ。良忠の門弟良弁尊観（一二三九―一三二六、異説あり）を祖とする。尊観は良忠のもとにあること三〇余年、建治二年（一二七六）伝書を付属され、その後、鎌倉名越谷に善導寺を建立し教えをひろめたことから、名越派の名が生まれたという。良忠滅後、宗義がまちまちであることから、これを一つにしようとする動きがあったが、尊観は自説の一念業成（ただ一言「南無阿弥陀仏」と念ずる者は、その教えに忠実であれば、往生ができ、広大な功德があるというもの）を主

張して譲らず、業成の前後は機に随つて不定であり、一念十念多念に通ずるとの多念業成となえる白旗派祖の寂慧良曉（一二五一―一二八二）と激しい論戦を交えたという。名越派は室町時代に入つて、主に関東・東北地方に教線を拡げ、良忠門下の六派が次々と白旗派に併呑される中、独自の道を歩んだ。しかしながら、白旗派との教学上の論争から、伝書の一つの箱に封じ、一握りの僧侶にしか見せないという極端な秘密主義をとったことが、派の発展を阻害する一因となり、四百余ヶ寺を超える勢力を誇った同派も、明治二十七年（一八九四）には白旗派の後身である現在の浄土宗に合流し、その歴史に幕を下ろした。同派の伝書の中には散逸したものも多く、同派の歴史に関しては判然としない部分もあるという。

(11) 『浄土宗全書』十六卷、『伝承資料集』一〇二―一〇三頁。

(12) 註（7）に同じ。

(13) 『伝承資料集』『和田文書』（解説）一〇八六頁。

(14) 遠藤(c)論文、一〇八頁。

(15) 遠藤(b)論文、一三四頁等。なお、『金光禪師行状』と同一線上にある和田文書中の金光上人に関する資料が、一時期津軽で語られる金光上人像の基準とみなされていたという歴史がある。このことが浄土宗の金光上人事蹟調査を促す要因になったとみられる。金光上人伝承の研究史的整理を行うにあたっては、留意すべき問題といえるが、本稿の主題と直接の関連はないので、委細は省略する。

(16) 遠藤(c)論文、六六頁。

(17) 『うとう』七号（一九三四）。

(18) 註（17）論文、二八頁。

(19) 「阿蘇系図」（東京・四ツ谷在住、阿蘇哲氏所蔵）。なお、弘前市西茂森の京徳寺（享祿二年（一五二九）、開基は浪岡御所北畠具永。元は浪

岡の五本松に創建されたが、津輕為信の命により現在地に移転。浪岡御所北畠氏の菩提寺である）にある同家の位牌にもほぼ同様の記載があるが、阿蘇家代々については戒名のみで、俗名の記載がない。位牌の記述で、阿蘇千代竹に該当するのは「少林院殿廊翁」であるが、千代竹の没年月日について、月日まででは位牌、系図とも合致するが、日付は、位牌では「十一日」、系図では「廿六日」と異同がみられる。

- (20) 浄土宗大辞典編纂委員会編『浄土宗大辞典』第三卷（山喜房仏書林、一九八〇）四九三～四九四頁。

- (21) 佐藤孝徳「浄土宗名越派三世良山上人について」（『いわき地域学会夏井地区総合調査報告』、いわき地域学会、一九八八）二二―頁。

- (22) 『浄土宗寺院由緒書』三十三「信州寺院由緒書」（増上寺史料編纂所編『増上寺史料集』第六卷、一九八〇）七六三～七六四頁。

- (23) 『伝承資料集』西福寺関連資料解説「四〇九～四一〇頁。

- (24) 『伝承資料集』四二六頁。

- (25) 『伝承資料集』西福寺関連資料解説「四〇七頁。

- (26) 遠藤聡明「宝永五年の弘前新寺町稲荷神社の勧請と別当白狐寺の造営」（『仏教論叢』四三号、一九九九）二二頁。

- (27) 註（26）論文、二二二頁。

- (28) 註（26）論文、二二三頁。なお、中川泰伸「浄土宗名越派の教線」（『印度学仏教学研究』第一八巻第二号）にも「名越派の性格は、大沢

円通寺月形函文書や如来寺文書、現今の民俗を通して考察してみる場合、多分に専修念仏的でない雑修雑行的性格が濃厚であったり、口伝法門的、秘事法的性格が強い」との指摘がある点も、『金光禪師行状』で法然上人が軽んじた雑行を修するという専修念仏の人と思えない金光上人像が描かれていることと関係するように思われる。

- (29) 『伝承資料集』『和田文書』（解説）一〇八七頁。

- (30) 唐代中国浄土教の大成者にして、浄土五祖中の第三位として日本の浄土宗で重んじられる善導（六二三～六一八）の撰書『般舟讃』の流伝に關しては「正倉院文書の『経律奉請帳』によれば、七四八年（天平二〇）以前に伝来し、さらに八三九年（承和六）、入唐八家の一人である靈巖円行が、『法事讃』などと共に請来した。しかし、その後一般に流布せず、法然上人もついに見られなかった。法然滅後、一二一七年（建保五）、禪林寺静遍が、御室の宝金剛院の一切経蔵において円行請来本を発見し、明真と入真によって一二三二年（貞永一）、法然滅後二〇年に至って、初めて開板された」（『浄土宗大辞典』第三卷、一九八〇）というのが今日の通説であるが、『望月仏教大辞典』第五卷（一九三三）によると「但し本朝高僧伝第十四等に西山証空が建保五年冬京都御室仁和寺宝蔵より発見せりとなし、又寛文十一年二月開板の般舟讃要義釈門義鈔の後跋に、証空は建保癸酉（即ち元年）より元仁甲申（元年）に至るの間、諸処に於て屢本書を講ぜしことを記す」との記載があるので、浄土宗西山派の間には異説が存在したようである。『望月仏教大辞典』第五卷では「恐らく事実には非ざるべし」の一言ですましているが、このことは『金光禪師行状』の『般舟讃』に關する奇妙な記述の源流を考えるうえで留意すべき問題と思われる。

- (31) 『仏教論叢』四四号（二〇〇〇）、二三頁。

#### 付記

本稿を執筆することができたのは、浪岡阿蘇家の系図を所蔵されている浪岡阿蘇家の本家の阿蘇哲氏及び同家所蔵の系図の所在、菩提寺の京徳寺の位牌の存在等をご教示頂いた阿蘇八千代氏、阿蘇哲氏のご住所をご教示頂いた成田秀夫氏、阿蘇家の位牌を管理されている京徳寺のご住

職夫妻等のご理解・ご協力の賜物である。なお、本稿には直接いかされていないが、浄土宗の金光上人事蹟調査を促す原因になった青森県内の金光上人顕彰運動等について弘前市新寺町西光寺の前住職工藤昌瑞氏よりも懇切丁寧なご教示を頂いたことも、問題の背景を理解するうえで大変有益なものであった。記して感謝の意を表したい。

（いでみつ・やすお 続日本紀研究会会員）